2013年 日本認知言語学会全国大会 ワークショップ

場の理論と日本語の文法現象

○　司会（代表者）岡 智之（東京学芸大学）
○　発表１：　岡 智之（東京学芸大学）「場の理論と言語類型論」
○　発表２：　新村朋美（フリー）「直示用法の指示詞・人称詞にみる日英の「場認識」の違い」
○　発表３：　櫻井千佳子（武蔵野大学）「言語獲得にみられる事態把握と場の言語学」
○　発表４：　小柳 昇（東京外国語大学）「存在スキーマを基本とした日本語の自他交替の分析
　　－場所の焦点化はどのような構文と意味を創り出すか」
○　発表５：　大塚正之（早稲田大学）「日本語の文法・談話と場の理論」

本ワークショップでは、場の理論に基づくとどのように日本語の文法現象を解明できるのか、その有効性を例証することを目的とする。また、これにより、場の理論の深化・発展を目指し、広く場の言語学の理解を広めていくことを目的とする。

「場の理論」とは、昨年のワークショップで明らかにされ、発表５でも詳しく述べられるが、「個物がある場所を基盤としながらすべてを個物と場の相互作用として見ていく」というパラダイムである。物理学の世界では、既に、個物と因果関係から世界を見るニュートン力学の世界から、場と個物との相互作用から見る「場の量子論」のパラダイムに転換してきている。このパラダイムを生物学などの自然科学のみならず様々な人文科学にも押し広げようというのが場の理論である（大塚2013）。西田哲学の「場所の論理」においては、主語と述語の関係において、述語が主語を包む関係、一般が特殊を包んでいく関係を基盤とするところから出発している。日本語学においては、こうした哲学から来る主語・述語の問題だけではなく、時枝文法の場面論や、佐久間鼎の課題の場、三尾砂の場と文の相関の原理などが提起されてきた。これらの提起を受けながら、岡（2013）では、ハや格助詞の問題などを事例にし、「場所の言語学」を提起した。今回のワークショップはそれらの応用編である。

発表1では、場の理論が言語類型論の分析にいかに応用されるか、その際、日本語の文法現象が重要な導きの意図になることを提起する。発表２では、日本語の指示詞や人称詞の使用が今ここの現場に密着したものであるのに対し、英語においては、現場から離れ抽象化された談話の場において言語発話が行われることが、実証的に明らかにされる。発表３では、言語獲得の問題を場の観点から位置づけなおし、実証的に明らかにする。また、発表４では、存在と所有の関係を、モノの焦点化か場所の焦点化かという観点から捉え、場所焦点化構文として従来の研究ではうまく説明しきれなかった自動詞文でありながら他動詞文であるというような構文を説明することを行っている。いずれも、日本語の文法現象を場という観点から積極的に位置づけ直していこうという試みである。

参考文献：

大塚正之（2013）『場所の哲学－近代法思想の限界を超えて－』晃洋書房
岡　智之（2013）『場所の言語学』ひつじ書房

「場の理論と言語類型論」

岡 智之（東京学芸大学）

１．本稿の目的

本稿では、場の言語学の観点から対格言語と能格言語の類型に関して考察する。能格言語は、出来事中心のナル型言語であることが言われている（池上1981）。本稿では、能格は、具格あるいは原因格が起源（近藤2005）であり、それは元来、場所性を持ったものである可能性を示す（「風で、扉が開く」）。また、自動詞の分類として「非能格動詞」「非対格動詞」が言われるが、その用語自体、対格言語から見た転倒した用語であり、場所的観点から「能動詞」「所動詞」（三上1953）という類型を精緻化させることを提案する。

２．能格言語の位置づけ

言語類型論では、世界の言語を能格言語、対格言語に大きく分ける（その他に活格という類型もあるが今回は触れないでおく）。場所論的観点からその位置づけを確認しておきたい。

まず、能格言語がどういうものかをみるために、角田（2009:34）に依拠してオーストラリア原住民語のひとつであるワロゴ語の例を挙げる。

（1）a. bama-φ nyina-n.
男-絶対格 座る-過去／現在 「男 座った／座る」
b. bama-**nggo** warrngo-φ balga-n.
男-能格 女-絶対格 殺す-過去／現在
「男が 女 殺した／殺す」

（1）a の自動詞文では、動作主の bama が格標識がゼロの絶対格であり、 b の他動詞文では被動作主の warrngo が絶対格で、動作主の bama は能格である（能格接辞は-nggo）。このように、自動詞の動作主と他動詞の被動作主が同型（絶対格）となり、他動詞動作主を別な格（能格）で示すような格組織を有する言語が能格言語だとされる。一方、自動詞の動作主と他動詞の動作主が同じ形態（主格）をとり、他動詞の被動作主が対格となる日本語や英語のような言語は、対格言語と呼ばれる。

ここで注意すべきは、能格構文の能格は他動詞の主語ではなく、主辞的補語にすぎないという指摘である（『言語学大辞典 第 6 巻 術語編』三省堂、1996：1051）。結論的に言うと、能格言語はナル的な事態把握を認知的ベースとした言語であり、能格は、ナル的事態に付け加えられたに過ぎない斜格であるので、それを対格言語の観点から見て主語と呼ぶのはふさわしくないと考えられる。池上（1981:229）においては、能格言語の文型は、＜Ａによって、Ｂが動く＞と表されるようなものであり、

対格型の「言語」では主語として文の中心的な位置を占めうるＡの部分は、ここでは出来事の＜起因＞を表す附属的な部分に過ぎない。すでに見たとおり、場所理論的には＜起因＞は＜起点＞的な範疇であり、＜起点＞が一般的に任意的な性格のものであることを考えれば、このような＜起点＞の扱いはもともとごく自然なことと言える。

としている。池上は、能格構文と受動文の平行性をいう立場からこのように言っているが、受動文というのは対格言語の能動文の転換であるという点から考えると、能格言語に受動態のような概念を持ってくることには疑問がある。筆者の立場から言うと、むしろ、能格構文は、＜Ａで、Ｂがなる＞というような標示が適当であって、＜Ａで＞の部分は、「から」で具現化される＜起点＞というより、「原因」と解釈される「で」ではないかと考える。わかりやすいように、日本語で（2）のような対比を考えてみたい。

（2）a. 風が　扉を　開(ひら)いた。
　　主格　　対格
　　b. 風で　扉が　開(ひら)いた。
　　原因格　主格

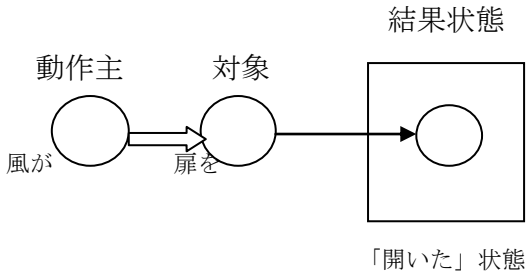


図１　「風が扉を開いた」の図式

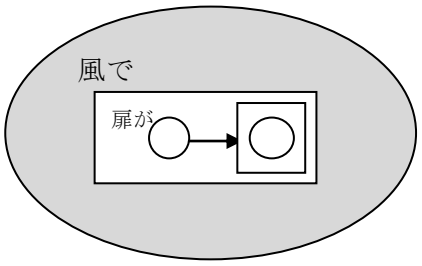


図２　「風で扉が開いた」の図式

「開(ひら)く」は自他両用動詞であり、この対比では、日本語はｂが自然であると言われるが、このとき、ａは「風が」が主格で動作主を表し、「扉を」が働きかけられる対象を表す対格言語の他動詞構造である。一方、ｂでは、「風で」という原因によって「扉が開いた」という事態が起こる自動詞構造であるが、「風で」がいわば能格に当たるとすれば「扉が」は絶対格になり、能格言語に近い構造と考えられる[注1]。対格言語である日本語にもこのような能格性が見られるのである。英語のような言語は、「動作主が　なにかを　する」（行為）を中心に事態把握をする（スル型言語）のに対し、日本語は「（場所で）　何かが　なる」を中心に物事を捉える傾向にある（ナル型言語）といわれる。そういう意味で、能格言語は、徹底したナル型言語だと考えてもいいのではないだろうか。つまり、対格言語と能格言語の対立は、スル型とナル型の対立に並行的に捉えられるわけである。対格言語は、主体－客体関係を基軸にして考える言語で、それが格関係では主格と対格に、文法関係では主語と目的語に並行的に表れている。一方、能格言語は、能格はあくまで斜格（動作主を表す補語）であって、対格は存在しない。基軸になるのは、「絶対格＋動詞」という出来事である[注2]（能格言語では、動詞は能格と一致はせず、絶対格と一致をする）。絶対格は他動構造では客体を表し、自動構造では主体を表すということは、絶対格自体は主体－客体関係には直接関与しないと考えて

もいいと言うことになる。つまり、主体－客体関係を基軸に考えていないのであって、能格言語を記述する際に、主語－目的語という文法関係を当てはめることは不適当であると考える。ゆえに、「能格性とは、自動詞主語と他動詞目的語が同じ格になり、他動詞主語が能格になる」というような一般的な特徴付けは、ふさわしくないと思われる。そもそも、自動詞、他動詞という分類自体も、他動詞は対格をとり、自動詞は対格をとらないという対格言語で見られる分類基準であって、これを能格言語に当てはめるのも不適当のように思われる[注3]。

さて、近藤（2005）では、(2) b の「風で」というような具格が能格の起源であるとしている[注4]が、本稿の立場からすると、「風で」は道具というより、原因であり、この原因は「で」のスキーマである場所性を持つものであると思われる。つまり、能格言語の能格は、場所から転じたものである可能性がある。近藤は、能格の具格起源説の根拠として、言語によっては能格と具格とが一体化しているという事実をあげる（カフカース諸語）。しかし、一方で能格と属格が一致している言語（エスキモー語など）もあることを考えると、属格と具格を共に能格の起源と考えることもできるだろう[注5]。そして、属格と具格の共通性はその場所性にあるということである。

また、近藤（2005）では、日本語の特殊な主語として、「お茶でいいです。」「私から始めます。」「私としてはそれをしたくない。」などのほかに、所格主語、具格主語の二つをあげ、副詞的要素が主語に転じたものであるとしている。

(3)　その殺人事件は新宿署で捜査している。
(4)　こちらで（当方で、手前どもで）それを処理しておきますよ。
(5)　施設から町に出た人々で、十三年前「わかば会」を結成した。
(6)　君とぼくとで『雷同嫌会』というのを拵えないか？
(7)　私一人で行く。

近藤は(3)（4）は所格主語、(5)～(7)は具格主語の例としている。こうした副詞的要素が生まれた主語が存在するという事実をもって、能格言語において能格が具格に由来するものであるという主張の裏付けにしようとしている。これらは主語論理にたつ近藤の立場からすれば、すべて動作主として主語と解釈できるかもしれないが、本稿の立場からは（3）～（7）のデ格要素は動作主的であるが、主語とは言えないと考える。たとえば、（７）の用法は、「はだしで行く」のような様態用法と共通する用法であり、それは場所的イメージを継承したものである。

３．非対格性の仮説への疑問と自動詞・他動詞類型の再考

関係文法や生成文法では、自動詞にも他動詞にも使われる動詞を能格動詞といい、自動詞の中で能動的な行為を表すものを「非能格動詞」、状態や存在・出現、非意図的行為などを表す動詞を「非対格動詞」と呼んでいる（影山 1996）。「非対格性の仮説」とは、「非対格動詞の主語が統語構造（D構造）において目的語相当として規定される」というものである。たとえば、An accident occurred. という非対格自動詞文は、D構造（深層構造）では An accident は目的語位置にあり、これを主語位置に移動させて、形成されるというものである。本稿では、深層構造からの移動というような装置は認めない立場であるから、An accident がもともと目的語位置にあったという仮定はとうてい認められない。「非対格動詞」という呼び名自体が、対格言語を基準にした転倒した呼び名であり、

理解しにくいものである[注6]。今回はそのことはおいても、ここで興味深いことは、このようないわゆる「非対格動詞」というのは、意味的に「存在・出現・発生」を意味する動詞で、There 構文に生じるというものである。

(8)　An accident occurred.
(9)　There occurred an accident.

これは、日本語に直訳すれば「そこで、事故が起こった」というものである。これは、「場所で、コトがナル」という事態把握に相当するものである。影山は、これらの「非対格自動詞は、主として状態や位置が変化するもの（対象物）を主語にとる動詞であり、これらの主語は自分の意志で動作するのではなく、自然に何らかの変化を被るもの（いわゆるナル型の表現）を指している」という。この「非対格動詞」の構文は、能格構文であり、ナル型構文なのである。このような観点から「非対格動詞」を位置づけ直してみたい[注7]。

日本語の動詞分類では、むしろ三上（1953）のいう、能動詞と所動詞との分類が有効であると思われる。まず、三上は、受身になるかならないかでこの二つを区別しているが、意味的には、能動詞は有情者の意図的行為を表し、所動詞は、「ある、見える、聞こえる、音がする、要る、似合う、できる、飲める」など存在、知覚、必要、可能などの「自然にそうなる」という意味を表す動詞となる。場所論的に重要なのは、この所動詞は、位格を要求するものが多いと言うことである。

（10）坊やにもう三輪車が要ります。（三上 1953:107）

ただ、所動詞のうち、多くはニ格をとるが、「起こる」などの出現系は受身にならないが、ニ格をとらずデ格をとる。「こわれる」など状態変化を表す自動詞の場合、場所格が表れるとは限らないというようなことはあるが、所動詞は先の「非対格動詞」と共通する部分が多い。場所論的観点から、日本語の自動詞・他動詞、能動詞・所動詞などの分類を精緻化していくことは今後の課題とする。

場所論的観点から、言語類型論の成果を継承し、能格性、対格性の問題を探求していくことは、今後の大きな課題である。これらの課題を綿密に検討していくことで、「場所の言語学」がより普遍的な言語理論たり得ることが証明されていくと考える。

注

1. 英語においては、He opend the door.（他動詞）　The door opened.（自動詞）のように、自他両用の動詞を能格動詞と呼んでいる（影山 1996）。影山は、能格動詞の基本は他動詞（使役構造）にあり、反使役化という操作を経て、自動詞を導くとしている。これに対し、二枝（2007）では、能格構文は使役の意味を持つ他動詞構文の他動詞用法から自動詞用法になったのではなく、自動詞として独立して存在すると主張している。そこから必要なときに使役主を付け加えて他動詞文を導くのである。近藤（2005）も、能格言語の最初は、直感表現である自動詞が基本であり、それに具格がつくことによって、能格が発生し、他動詞が生まれたという議論を展開している。原初の言語では、そもそも自動詞と他動詞の区別もなく、格標識も存在しなかった。まず「風、扉、開く」のような文に、原因と結果の関係を明示するために「風で、扉　開く」というような具格が付加される。そして、「父と母とで　扉　開く」のように具格要素が人に拡大されることによって、能動的主体つまり行為者として認識され、「父と母とで　扉を開いた」のような意味に傾き他動詞文に

変わっていった。それがさらに「父と母とで　扉　押す」のような絶対他動詞にも拡大され、能格が発生したとする。近藤の議論はほぼ賛成するが、ただ能格言語において、対格言語のような他動詞・自動詞の区別を持ち込むのは疑問である。ここで、日本語の「風で　扉が開いた」の文に返ると、この文自体は自動詞文であるが、「開いた」は自他両用の動詞で、いわゆる能格動詞に匹敵するので、能格構文と考えられ、「風で」が（厳密には能格ではないが）能格に相当するものだと考えてもいいと思われる。
2.「能格構文では行為に焦点を合わせるため、その行為が影響を及ぼす目的物にも当然焦点が合わせられる結果、その目的物を表す名詞が絶対格の形をとり、行為の主体たる行為者はむしろ斜めに表象され、したがって、これを表す名詞はいわば主辞的補語の役をする能格の形をとるものである。」(『言語学大辞典術語編』三省堂、p1049)
3. 旧ソビエトの内容類型学を提唱するクリモフは、能格言語においては、他動詞・自動詞の区別ではなく、行為主動詞(agentive verb)と事実主動詞(factitive verb)の二つに区別するべきであるとしており、石田（2008）ではそれを能格動詞と絶対動詞と言い換えている。これらは対格言語の他動詞・自動詞に直接対応するのではなく、両方にまたがる動詞もあり、複雑である。であるから、対格言語の他動詞・自動詞の区別を直接能格言語に当てはめることはできないと考えられる。
4. 欧米の言語類型論では、インド・ヨーロッパ語も古くは能格言語であり、その起源は属格であったという説が有力である（松本 1988）。これに対し、旧ソヴィエトの内容的類型学では、圧倒的多数の能格言語において、属格が存在していないことをあげ、能格の属格起源説が誤りであるとしている。
5. 能格と属格が一体化している言語として、エスキモー語の他に、台湾のパイワン語、中米インディアンの言語であるソケ語などがあげられる。また、日本語のガも本来は属格助詞であったものが主格助詞として使われているものである（『言語学大辞典術語編』）。ちなみに、日本語のガに関しては、「富士山が見える」、「リンゴが食べたい」のように、主体だけではなく、対象（客体）をもマークする。このことは、能格性を表しているのであろうか。今後の課題として考えてみたい。
6. 二枝（2007）でも、非対格動詞という呼び名は、他動詞文を中心に考え、その目的語が自動詞文の主語になるという他動性の視点から見た考え方であるとしてしりぞけ、これらの動詞を能格動詞と呼び、能格動詞は本来自動詞であって、そこから必要なときに、使役主を付け加えて、他動詞にするという考えを述べている。
7. 能格言語としてあげられるグルジア語においては、動詞は大きく、能格の項をとるものととらないものに二分されるという。他動詞は常に能格をとるが、自動詞には能格をとるものととらないもの（主格あるいは絶対格をとる）があるとされる（児島 2007）。また、能格を取る動詞では、動詞が過去形の場合のみ能格が表れるという。このような現象を分裂能格という。能格をとる自動詞は、「遊ぶ、話す、考える、眠る」などの「行為者的な、能動的な」動作主の行為を表す。一方、能格を取らない自動詞は、「死ぬ、割れる、疲れる、～になる、立つ、座る、行く、いる、ある」などのような「非行為者的な、非能動的な」主体に起こる事態が表すものが多いという。この区別は、生成文法などでいう非能格動詞と非対格自動詞と対応しているが、呼び名は全く正反対である。能格言語からすれば、むしろ「遊ぶ」などのスル的な行為を表す動詞が能格動詞であって、「死ぬ」などのナル的事態を表す動詞が非能格動詞と呼ぶにふさわしいであろう。「非対格動詞」という呼び名自体が、主体－客体関係すなわち、「主体－対象―他動詞」の構造を基本とする対格言語を標準とした呼び名であって、能格言語の立場からするとそれは転倒した呼び名となるのである。

参考文献

石田修一（2008）「G.A.クリモフ著「内容的類型学原理」についての覚書」『類型学研究』2：53-105.

池上嘉彦（1981）『「する」と「なる」の言語学』大修館書店.

岡 智之（2013）『場所の言語学』ひつじ書房.

影山太郎（1996）『動詞意味論－言語と認知の接点』くろしお出版.

児島康宏（2007）「グルジア語の能格」麗澤大学言語研究センター.

近藤健二（2005）『言語類型の起源と系譜』松柏社.

角田太作（2009）『世界の言語と日本語－言語類型論からみた日本語 改訂版』くろしお出版.

二枝美津子（2007）『主語と動詞の諸相－認知文法・類型論的観点から』ひつじ書房.

松本克己（1988）「印欧語における能格性の問題」『東京大学言語論集'88』、東京大学文学部言語学研究室,1-19.

三上 章（1953=1972）『現代語法序説―シンタクスの試み』くろしお出版.

直示用法の指示詞・人称詞にみる日英の「場認識」の違い

新村朋美（フリー）

1. 要旨

英語話者は空間や時間を個物と同様に客観的にとらえる、つまり、客体視可能な対象と考える（Lyons 1982：121）のに対して、日本語話者は空間や時間を話し手のイマ・ココと切り離すことはできず、客体視することは難しい。本稿は日英の指示詞と人称詞を対照して、日英の空間認識の違い、特に「場」のとらえかたの違いを明らかにする試みである。

英語話者は指示対象を発話の現場の物理的空間に位置付けるのではなく、抽象化してとらえる、即ち、「脱現場化」（新村 2006:36）してとらえる傾向が強い。また、一人称代名詞や二人称代名詞（I・YOU）は、現場から転位した談話上の抽象的「話し手」「聞き手」という認知の表現である。このように対象も人も抽象化してとらえる英語話者の認知の基盤は、物理的空間に基づく「発話の現場」ではなく、抽象的空間としての「談話の場」にある。

対照的に、現場依存が極めて強い日本語は、認知の基盤を「発話の現場」に置く。日本語話者は対象を現場の物理的空間に位置付けてとらえる。話し手も聞き手も同じ現場に位置付けてとらえ、「話し手のなわばり」「聞き手のなわばり」を認識する。従って、日本語の話し手と聞き手は抽象的対話者ではなく、現場の具体的関わりを持つ対話者という認知である。

これらの論旨を以下の日英対照例で検証する。

2. 指示詞の直示用法の日英対照

直示用法（現場指示用法）の指示詞は、概して、話し手が対象を近くにとらえているか遠くにとらえているかを表出する。しかし、この遠近のとらえかたは言語普遍ではない。「(日本語の)指示の基盤は常に現場及び現実の経験にあり」（金水・田窪 1990: 146）、日本語話者はあくまでも現場依存の認知であるのに対して、英語話者は指示対象を脱現場化してとらえる傾向が強い。対象が話し手の掌中にあっても、それに嫌悪の気持ちを抱いて心理的に遠ざけたいと思えば that で指示し（Lyons 1981:235 ）、対象との物理的距離の如何に関わらず話し手が対象に抱く好悪の感情や態度を心理的遠近として this や that で表す(Lakoff 1974)。また、Strauss (1993) によれば、英語の指示詞が表出するのは対象の遠近ではなく、対象への注目度（FOCUS）であって、this は HIGH FOCUS、that は MID FOCUS、it は LOW FOCUS を表す。Niimura (2003) は日英の指示詞の意味、機能の違いを、日本語の指示詞が「場への位置づけ（locating）」であるのに対して、英語の指示詞は「対象の多様なとらえかたの提示（presentational）」であるとする。「指示のダイクシスは言語普遍的にナワバリの原理で記述可能」（安藤 1986:215 ） ということにはならない。

上記の論旨を英語の指示詞 this・that・it と日本語の指示詞コ・ソ・アの直示用法例を対照して検証する。以下の検証例は、指示状況のわかりやすい漫画を利用して英米日のネイティブスピーカー

各 50〜70 人に指示語を直感的に回答してもらったデータ（Niimura 2003、新村他 2011）に基づく[i]。

2.1. 話し手に近い対象指示

例①[ii]は女の子が読み終えた本を眼前に手にして「これは面白かった、もう一度読みたい」と言っている場面である。日本語では話し手に近い対象は「話し手のなわばり内」という場に位置付けてとらえるので必然的にコ指示となる。ところが、英語話者は下記のデータに見るように、眼前の、自分の掌中の本を this で指示するとは限らない。この場面では、読み終えた本を時間的に過去、即ち、時間的に「遠い」対象ととらえる that 指示選択が 49%で、this 指示選択（36%）より多い。また、読み進む過程で本は場から乖離した単なる旧情報となったととらえる it 指示選択も少数ながらある。

{ **That**(49%) / This (36%) / It (15%) } was a wonderful book! Once I started it, I couldn't put it down!　　I definitely will want to read { **this one** (78%) / that one (16%) / it (5%) } again!　　(Niimura2003)

後半の「是非もう一度読みたい」では、大多数が this 指示を選択する。ディスコース上の旧情報になっている指示対象の本を it ではなく this で指示する意図は、「他の本ではなくまさにこの本」と対象を対比強調したい気持ちの表出（HIGH FOCUS）であって、距離的近さの表出ではない。

日本語が指示対象を発話の現場に位置付けてとらえるのに対して、英語は現場から抽象化してとらえる傾向が強いことを示す例である。

例②[iii]は姉と弟の対話で、弟が描いた牛のお絵描きを手に持って眺めながら、姉が「これは牛じゃないわ、犬みたいよ」と言っている場面である。対象が話し手の掌中にあれば日本語では話し手のなわばり内に位置付けてコ指示になるが、英語では下記のように多様なとらえかたになる。

{ **That**'s (69%) / This is (28%) / It's (3%) } not a cow.

{ **It** (75%) / That (17%) / This (8%) } looks more like a dog.　　（新村他 2011）

指示対象の絵が話し手の眼前の掌中にあるのに、英語話者の多く（69%）は that 指示を選択する。これはその絵が話し手のイメージする牛とはかけ離れていて不快で心理的に遠ざけたい対象ととらえている that 指示である。また、それに続く文では、大多数（75%）が同じ対象を場から乖離した単なる旧情報と認知して it で表出する。この例も英語話者は指示対象を発話の現場に位置付けてとらえるよりも、場から抽象化してとらえる傾向が強いことを示している。

2.2. 聞き手に近い対象指示

次に聞き手に近い対象の指示表現を例③[iv]でみよう。相手が「ほら」と言って差し出したカードを日本語話者の大多数は「なんだい、それ」と、対象を相手のなわばり内に位置付けてとらえてソ指示する。他方、英語話者の多くは相手の掌中にある対象を this で指示して、What's **this**? と言う。これは対象を発話の現場に位置付ける認知ではなく、その対象に対する強い関心（HIGH FOCUS）の表出である。

What's { **this** (58%) / that (42%) }?
なんだい、{ **それ** (85%) / これ (15%) }?
(新村他 2011)

2. 3. 話し手のなわばり、聞き手のなわばり

対象を発話の現場に位置付けて認知する日本語では「話し手のなわばり」「聞き手のなわばり」を認識し、それをコとソで表出する。そのなわばりの基軸に在る話し手、聞き手もコとソで表出することが可能だ。例④[v]の雪合戦の場面で、日本語の「こっちは二人、そっちは一人」は、英語では There's two of us and only one of you となる。日本語話者は現場に臨場して、話し手のココから聞き手をソコにとらえる。日本語の指示詞は現代のみならず古代から人称詞として使われて来た（李 2002）ということは、通時的に日本語の話し手や聞き手は場に位置付けてとらえられて来たということになる。他方、英語は話し手も聞き手も現場から転位した、即ち、脱現場化した抽象的対話者という認知が us や you となり、日本語のように場に話し手のなわばり、聞き手のなわばりを強く認識することはない。

2. 4. 直接経験の対象指示

味覚、嗅覚、触覚などに関わる対象指示も日英では異なる。例⑤[vi]の「こんなうまいジェリードーナッツは食べたことないよ」と食べ終えたジェリードーナッツを直接経験の対象としてコ指示する日本語に対して、英語では食べ終えた対象を時間的に過去ととらえて **That**'s the best jelly doughnut I ever tasted となる。 例⑥[vii]の嗅覚の例では、「なんだ、この嫌な匂いは？」 という日本語の場面は、 What's **that** disgusting odour? となる。また、例⑦[viii]の木枯らしが身にしみて「これは冷たい風だ！」という場面は **That**'s a cold wind となる。日本語話者は発話現場での自分の直接体験の対象を我が身に結びつけて必然的にコ指示とするが、英語話者は直接経験の対象でも⑤のように対象を時間的側面でとらえたり、また、⑥⑦にみるように実体が目に見えない匂いや風などの対象は抽象的、観念的にとらえて that 指示とする。

上記の指示詞の検証例①～⑦から明らかなことは、日本語話者が発話の現場に身を置いて、その場に指示対称を位置付けてとらえる、あるいは、その場の直接体験の対称として認知するのに対して、英語話者は指

示対象を現場に位置付けるのではなく、脱現場化した抽象的対称として認知するということである。

3. 人称詞の日英対照

英語では対話者が誰であろうと全ての話し手は I、聞き手は YOU になる。この人称代名詞は具体的現場から転位した抽象的「話し手」「聞き手」の表出である。日本語には英語の I、YOU にあたるものはない。辻村（1986）によれば上代から現代の日本語に見られる一人称は５１種、二人称は８１種という。日本語は相手に依存して自己規定し（鈴木 1973）、日本語の一人称、二人称には上下公私強弱性別内外が色濃く反映する（三輪 2005）。しかし、この多様な自称詞や対称詞は話し手が自分自身や相手を取り立てて表現する場合に使われるのであって、その必要がなければ日本語の話し手は通常ゼロ表現になる。発話の現場に身を置く日本語の話し手は直示座標軸のゼロ点に在ってそこからの見えを言語化する。従って、「見えない自分は言えない自分」（本多 1994）なのである。日英の話し手、聞き手がどのように認知されるか、その違いを次の例で検証しよう。

例⑧[ix]は、老人がふと立ち止まって、「ハテなんで走ってたんだろ？」と自問する場面である。日本語の話し手は発話の現場に臨場してそこからの見えを言語化する。話し手はその場の直示の座標軸のゼロ点に在るので自分自身は見えに含まれず言語化されない。この話し手（老人）は周りの景色の変化で自分が走っていたことはわかるが、自分自身は見えないのでゼロ表現になる。一方、英語話者は Now why was **I** running? と自己を言語化する。抽象志向の英語では、話し手は自分自身も現場から転位した（談話上の）「抽象的話し手」として客体視し、その認知を I として表出する。

うそでしょ　いや、本気だよ

例⑨[x]の 姉と弟の会話、“**You**’re kidding!” “No, **I**’m serious” では 、対話者はそれぞれ抽象的「話し手」「聞き手」という認知で I と YOU になっている。一方、谷川俊太郎の日本語訳、「うそでしょ」「いや、本気だよ」には人称詞がないが、充分に充足した日本語表現である。

ぼくんだ！　おれんだ！　私のよ！

次に、日本語で話し手や聞き手を言語化する場合、即ち、他と比較対照したり取り立てて表現する場合をみよう。 例⑩[xi]は草野球で遊ぶ子供達３人が飛んで来るボールを「自分が取る」と言っている場面で、英語では３人とも 皆同じく **I** got it! と言う。英語話者は自分自身を場から転位した、脱現場化した「抽象的話し手」ととらえるので皆同じく I になるのである。対照的に、谷川の日本語訳では、「ぼくんだ！」「おれんだ！」「私のよ!」と、その場の具体的状況や人間関係を反映した自己認知を異なる自称詞で表出している。

例⑪[xii]は、母親が小学校に入学したばかりの子供に向かって「ナマエもかけないなんて、ママはずかしいワ」と小言を言っている場面。日本語では話し手は現場の具体的人間関係を反映して、即ち、自分を相手（子供）の母親として認知し、自分を「ママ」と言語化する。英語では **You** can’t even write **your** name? **I**’m ashamed. となり、その場の具体的人間関係を表出することなく、対話者は抽象的話し手、聞き手という認知である。

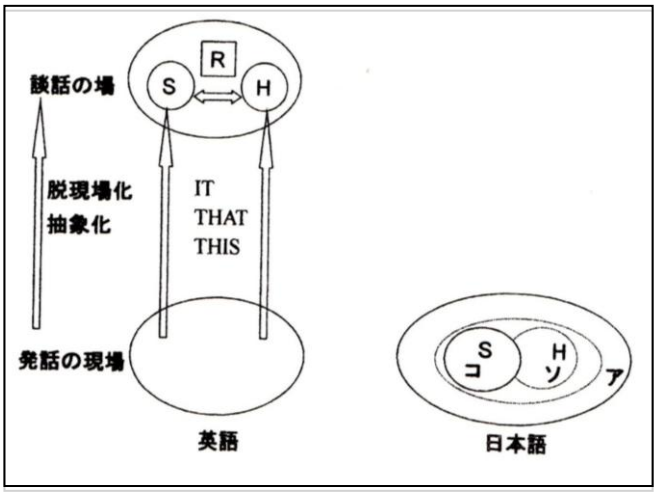
例⑫[xiii]はタクシーの運転手と乗客の会話で、運転手が、「オヤ！ お客さん、いつかも乗ったねエ」 と言う。運転手はその場の具体的状況に基づいて、即ち、運転手と客という人間関係を認知して相手を「お客さ

ん」と呼ぶ。 それに対して英語では、Hey! **You** were in my cab before, weren't **you**? となり、その場の具体的人間関係を表出することはない。対話者は抽象的話し手、聞き手という認知である。

上記⑧〜⑫の検証例で、英語話者は対話者を現場から転位した抽象的話し手、抽象的聞き手としてとらえ、その認知をＩ、YOU で表出するのに対して、発話の現場に身を置く現場依存の日本語話者では話し手はゼロ表現になるか、あるいは、言語化する必要がある場合には発話の現場の具体的状況や人間関係を反映した多様な表現になることを見た。

4. 日英の「場認識」の違い

これまでの検証結果を、日英の「場認識」の違いとして下記の図にまとめた。肝要なのは二つの場の存在である。図の下方の場は物理的空間に基づく具体的「発話の現場」、上方の場は脱現場化した抽象的観念的空間としての「談話の場」である。S は話し手、H は聞き手、R は指示対象を表す。



指示詞 this、 that、 it や、人称詞 Ｉ、YOU の検証例に見たように、英語話者は指示対象や話し手、聞き手を発話の現場の物理的空間に位置付けてとらえるのではなく、現場から転位した、即ち、脱現場化した抽象的観念として認知する。英語の人称詞 I や YOU は現場から転位した抽象的話し手、聞き手という認知の表出であり、指示詞 this、that、it は、指示対象の諸側面（時間的、空間的、感情的、心理的遠近、あるいは、ディスコース上の新旧情報など）を抽象的にとらえる認知の表出である。従って、英語話者の認知の基盤は発話の現場ではなく、脱現場化した抽象的空間としての「談話の場」にあると言える。

対照的に、日本語話者は指示対象も、話し手、聞き手も、発話の現場の物理的空間に位置付けてとらえる。発話の現場に身を置き、話し手のココを基点にする事態認知では、話し手は通常ゼロ表現となる。また、話し手のココを基点にして「話し手のなわばり」「聞き手のなわばり」を認知し、指示対照を話し手のなわばり内（コ）、聞き手のなわばり内（ソ）、（あるいは、その外（ア））に位置付けてとらえる。話し手のココから聞き手をソコにとらえる日本語では、話し手も聞き手も発話の現場に身を置く。従って、日本語の対話者は、英語のように現場から転位した抽象的対話者とは異なり、その場の具体的な状況下での人間関係を認知した対話者となる。このように現場依存の極めて強い事態認識は、日本語の多様な自称詞、対称詞表現や、相手に対する配慮を示す多様な待遇表現を産出することになる。

英語話者にとっての場は脱現場化した抽象的「談話の場」であり、日本語話者にとっての場は「発話の現場」にある。日本語にも談話の場があることは無論だが、日本語の談話の場は発話の現場に限りなく近いところにあって、英語の談話の場ほど抽象度は高くないと考えられる。

[i] 本稿の紙数に限りがあるので、検証例の漫画は縮小して提示、あるいは省略した。漫画及び詳細なデータは『日本認知言語学会第１４回大会　Conference Handbook 』2013:6-8 を参照されたい。

[ii] *Betty* in *Archie Comics* (2001) Archie Comic Publications, Inc.

[iii] *Snoopy 9 どうしてなんだろ？* (2002) Charles M. Schulz 作　谷川俊太郎訳　角川書店

[iv] *Snoopy 1 行くよ！今行くよ！*(2002) Charles M. Schulz 作　谷川俊太郎訳　角川書店

[v] *Snoopy 3 どうだいすごいだろ？*(2002) Charles M. Schulz 作　谷川俊太郎訳　角川書店

[vi] *A Peanuts Book Featuring Snoopy 4* (1991) Charles M. Schulz 作　谷川俊太郎訳　角川書店

[vii] *Beryl the Peril* in *Dandy* (1994) D.C. Thomson & Co. Ltd.

[viii] *The Numskulls* (1994)

[ix] 対訳サザエさん 12, *The Wonderful World of Sazae-san* (1997) 長谷川町子作 J.&D. Young 訳　講談社

[x] *Snoopy 3 どうだいすごいだろ？*(2002) Charles M. Schulz 作　谷川俊太郎訳　角川書店

[xi] *Snoopy ２みんなそろったかい？*(2002) Charles M. Schulz 作　谷川俊太郎訳　角川書店

[xii] 対訳サザエさん 12, *The Wonderful World of Sazae-san* (1997) 長谷川町子作 J.&D. Young 訳　講談社

[xiii] 対訳サザエさん 12, *The Wonderful World of Sazae-san* (1997) 長谷川町子作 J.&D. Young 訳　講談社

＜参考文献＞

安藤貞夫 (1986) 『英語の論理、日本語の論理（対照学的研究）』　大修館

金水敏・田窪行則　(1990) 「談話管理理論からみた日本語の指示詞」『認知科学の発展』3: 85-115　講談社

鈴木孝　（1973）『言葉と文化』岩波書店

辻村敏樹　(1986) 『敬語の史的研究』東京堂出版

新村朋美　(2006) 「日本語と英語の空間認識の違い」『月刊言語』 Vol.35 No.5 35-43

新村朋美・単娜・鄭若曦・ハヤシブレンダ (2011) 「日本語・中国語・英語の指示語表現にみるダイクシス構造の違い」　『日本認知言語学会論文集』第 11 巻 ：349-360

本多啓 (1994) 「見えない自分、言えない自分 : 言語にあらわれた自己知覚」『現代思想』Vol.22 No.13: 168-177

三輪正　(2005) 『一人称二人称と対話』人文書院

李長波　(2002) 『日本語指示体系の歴史』京都大学学術出版会

Lakoff, R. (1974) Remarks on This and That. *Papers from the tenth regional meeting*: 345-356. Chicago Linguistic Society

Lyons, J. (1981) *Language, Meaning and Context*. Fontana Paperbacks

Lyons, J. (1982) Deixis and Subjectivity: *Loquor, ergo sum*? *Speech, Place, and Action* (edited by R.J. Jarvella & W. Klein) John Wiley & Sons Ltd.

Niimura, T. (2003) Contrastive Analysis of Japanese and English Demonstratives: Differences in Speaker Stance. Ph.D. thesis. University of London.

Strauss, S, (1993) Why ‘this’ and ‘that’ are not complete without ‘it’. *CLS*. 29: 403-417

言語獲得にみられる事態把握と場の言語学

櫻井千佳子（武蔵野大学）

１．はじめに

子どもはその言語らしい話し方をどのように獲得していくのだろうか。日本語と英語の事態把握の違いとして、ナル的な言語とスル的な言語（池上 1981）、「ある言語」と「する言語」（金谷 2004）など、岡（2013）でも指摘されているように、日本語は事態を「コトの生成（存在）」を基本にして解釈するのに対し、英語は事態を「状態が変化する」という他動的関係や因果性によって解釈するということが言われている。このような事態把握の相違は、子どもが言語を獲得する初期の段階に既にみられるものなのだろうか。また、どのような発達段階を経るものなのだろうか。この事態把握の相違を言語獲得研究に照らし合わせて考えると、「異なる言語の話し手は、言語を獲得していくプロセスにおいて、異なる事態把握をするようになるのだろうか」という言語と認知の関係についての問いに手がかりを与えることになる。

本研究では、同じ出来事を描写している 3 歳児、5 歳児、9 歳児の日本語と英語のナラティヴのディスコースデータを比較することによって、言語の発達段階における事態把握の傾向を比べ、それぞれの言語に典型的な事態把握が表れている表現を獲得していくことを示す。本研究では、特に、3 歳児のデータに注目する。3 歳児のデータでは、日本語でも、また、英語でも必ずしも事態を他動的関係によって解釈しているわけではなく、他動的関係にはこだわらず事態をまるごと成立するものとしてとらえている言い回しが使われていることを示す。さらに、このことが、井出（2006）で言われている日本語の語用論の原理の解明に不可欠な場の要素とどのような関係にあるのかを論じる。

２．Frog Story の研究

本研究のデータは、Berman and Slobin（1994）の Frog Story の言語獲得研究プロジェクトによるものである。この研究プロジェクトでは、”Frog, where are you?” (Mayer, 1969)という文字のない 24 枚の絵によって構成されている絵本を被験者に見せて、話の内容について語っているデータを様々な言語で様々な年齢の被験者から収集し、同じ出来事を表現しているナラティヴの言語間の比較、また、発達段階を追っての比較を行っている。（絵柄については図を参照）。この Slobin らによる一連の研究では、”thinking for speaking”という言語使用レベルにおける言語相対説を唱えている。これは、子供は獲得する母語の文法的な特徴により、その言語の「発話のための思考」をするようになるという考え方である。

本研究では、状態変化をどのように解釈するのかを日本語と英語で比較するために、他動性の高いシーンについて注目し、そこでは、他動的関係がどのように言語化されているのか、またはされていないのかを、発達段階を追って分析する。

３．事態における他動的関係の認知と表現

シカが少年と犬を崖から突き落とす、という他動性の高いシーンにおいて、その他動的関係はどのように言語化されているのだろうか。

(1) Then it turns out they're a deer's antlers, so- and he gets- he lands on his head and he starts running.　And he tips him off over a cliff into the water.　And he lands. [9;5]

(2) 男の子はいたずらをしていたのですが、シカを怒らせてしまい、池の中に落ちてしまいました。[9;9]

上記の(1)と(2)の例のように 9 歳児のデータでは、英語では、動作主（シカ）、被動作主（少年）が agent と patient という格で示されているものが多くみられ、日本語では、シカを怒らせた結果として少年が池の中に落ちてしまったというような表現がみられている。これは、英語では動作主が被動作主に働きかけることによる状態変化を示す捉え方をしているのに対して、日本語では結果として少年が池の中に落ちていることを捉えていることを考えられる。

このような英語と日本語による相違は、発達段階の早い時期にもみられるのだろうか。(3)と(4)は 5 歳児のデータである。

(3) And this time – male deer got the um – the boy and threw him over a cliff into a pond. [5;10]

(4) 男の子がシカにのっかっていて、沼におちてしまいました。[5;10]

上記の 5 歳の被験者のデータは、英語と日本語の同年齢帯のデータの典型的なものである。ここでも、9 歳の表現と同様の捉え方の相違がみられる。つまり、英語のデータでは、シカが男の子を沼に突き落したことが､動作主の male deer と被動作主の the boy や him で表現されているのに対し、日本語のデータでは、シカという動作主が示されておらず、沼に落ちたその状態に焦点があたっている。

さらに、年齢の低いデータでは、下記のように、英語でも日本語でも、シカが男の子と犬を突き落とすという他動的関係が表現されていない。(5)と(6)は、3 歳児のデータである。

(5) A reindeer!　And then they all splash into the water. [3;9]

(6) シカがずっといってて、男の子とわんちゃんがびしょぬれになっています。[3;11]

(5)と(6)では、英語においても、シカが男の子を突き落すという他動的関係を捉えていることを示す表現が使われていないことを示している。これは、言語獲得の初期段階において、出来事の他動的関係を把握することが認知の中心的な側面であるとする考え方に示唆を与えるものである。つまり、岡（2013）で指摘されているように、言語獲得の初期で出来事を「客観的把握」が成立していると考えることに疑問を呈し、出来事の他動性にはこだわらず事態をまるごとに成立するものとしてとらえる「主観的把握」があることを提案するものである。

４．事態把握と場の言語学

本研究では、同じ出来事を表現している言語データを日本語と英語で比較することによって、他動的関係が示されているような場面について、それぞれの言語でどのように表現されるのかについて考察をした。9 歳児、5 歳児の言語データは、英語においては他動的関係が明示されるような言語表現がみられる一方、日本語においては、その出来事の結果に注目し、他動的関係が必ずしも明示されていないことを示した。このことにより、その言語に特徴的にみられるような事態把握が 5 歳という言語発達段階で獲得されていることを示していると考えられる。さらに、3 歳児の言語データは、英語においても、動作主、被動作主について言及することなしに、他動的関係を捉えず、事態をまるごとに成立するものとしてとらえている視点を反映した言い回しが使われていることを示した。

場の言語学では、言語の話し手は場に依存して場の中に存在すると考える。そこでの出来事の捉え方は、その場所で起こった出来事をまるごとに捉えるものである。対して、ある主体が対象に対して働きかけを行い変化を与えるという他動的関係が明示されるような出来事の捉え方は、場から離れて存在する話し手の視点である。このような概念は、場所的な捉え方＝日本語の論理、主体的な捉え方＝英語の論理として、対立するもののように捉えられがちであるが、岡（2013）が指摘するように、場所的思考が基底的で、主体的思考がある、と考えることができよう。本研究では、初期の言語獲得のデータをみることによって、言語使用の基底には、日本語においても英語においても、言語の話し手が場の中に入り込み出来事を捉えるという場所的思考がある可能性を論じた。

本研究では、ナラティヴデータの中で、シカの場面での叙述表現だけを取り上げて考察したが、ディスコース全体を通じて、物事をまるごとにとらえている表現がどのように見られるのか、さらなる検証が必要だと考えられる。また、その叙述の場面において、語り手である子どもの視点が絵のどの登場人物に実際に向けられているのか、という視覚的な情報についても考慮に入れ、認知と言語の関係をみていくことが有効だと考えられる。

＊本研究は、日本学術振興会科学研究費補助金基盤研究（C）（研究代表者：大塚正之）「言語コミュニケーションにおける場の理論の構築:近代社会の問題解決を目指して」（2011 年度-2013 年度）の交付を受けたものである。

参照文献

池上嘉彦（1981）『「する」と「なる」の言語学』大修館書店
井出祥子（2006）『わきまえの語用論』大修館書店
岡智之（2013）『場所の言語学』ひつじ書房
金谷武洋（2004）『英語にも主語はなかった』講談社
Berman, R. A., & Slobin, D. I. (1994). Relating events in narrative: A crosslinguistic developmental study. Hillsdale, NJ: Lawrence Erlbaum Associates.
Mayer, M. (1969). Frog, where are you? New York: Dial Press.

Mayer, M. (1969). Frog, where are you? New York: Dial Press.

存在スキーマを基本とした日本語の自他交替の分析
－場所の焦点化はどのような構文と意味を創り出すか－

小柳昇（東京外国語大学）

1. はじめに

従来の日本語の自他交替の研究は使役起動交替を中心に進められてきた。それは認知言語学的には行為連鎖モデル（Langacker1991）や因果連鎖モデル（Croft1991）などの認知ネットワークモデルを前提としていた。しかし、このような主客分離を前提とした事態認知だけでは日本語の自他動詞構文の全体を分析するには不十分である。岡（2013）で主張されているような「場の理論」に基づいた分析が不可欠であり、モノと場の二者の関係、つまり主客を一体のものとして捉える分析が必要である。本研究では存在スキーマを基本として拡張した所有スキーマを事態認知に組み込んだモデルを提案し、これによって非意図的な事象を表す自動詞文と他動詞文の対立が統一的に説明できることを主張する。

2. 使役起動交替ではない自他交替をどう説明するか

図１に示した参与者間のエネルギーの伝達または因果関係に基づいたモデルでは、(1）のような使役起動交替、つまり使役イベント全体を表す他動詞文（1b）と変化・状態を表す自動詞文（1a）の交替はうまく説明できる。

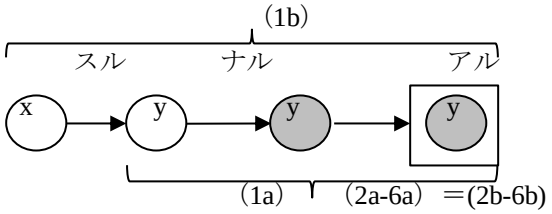


図１　行為連鎖／因果連鎖モデルによる事態の認知の概略

（1）a. グラス $_{y}$が割れた。　　b. 太郎 $_{x}$がグラス $_{y}$を割った。

しかし、(2）～（6）のような構文交替はこのモデルではうまく説明できない。それぞれの（a）のガ格名詞句が（b）ではヲ格名詞になり、構文上は自動詞文と他動詞文の対応関係になっているが、それが表している事態はどちらも変化・状態の部分である。なぜ同じ事態を描写しながら、構文が交替するのだろうか。

（2）a. その仕事に(は)危険 $_{y}$が伴う。　　b. その仕事は危険 $_{y}$を伴う。
（3）a. 桃の木に実 $_{y}$が結ぶ。　　b. 桃の木が実 $_{y}$を結ぶ。
（4）a. 山に地滑り $_{y}$が起きる。　　b. 山が地滑り $_{y}$を起こす。
（5）a. 大雨で川の水かさ $_{y}$が増した。　　b. 大雨で川が水かさ $_{y}$を増した。
（6）a. 太郎の席 $_{y}$が(AからBに)かわった。　　b. 太郎は(AからBに)席 $_{y}$をかわった。

（2）（3）（4）の構文交替では、自動詞文の場所句が他動詞文の主語名詞句（または主題）になっており、(5）（6）では自動詞文の主語名詞句「N1 の N2」の「N1」が他動詞文の主語名詞句（または主題）になり、「N2」がヲ格名詞句になる、という特徴が観察される。

Langacker（1990）は、通常は背景となるセッティングにも際立ちが当たり主語になる場合がある

とし、それを‘setting subject construction’と呼んだ。際立ちの与え方によって構文が交替する点は本研究も支持するが、そのような違いにどのような意義があるのかが構文交替の観点から十分に説明されていない[1]。中村（2000）は、変化対象の「部分」をトラジェクターにするのか、「全体」をトラジェクターにするのかの違いによって構文が交替すると分析している。部分・全体の関係に注目する点は本研究も支持するが、なぜ自動詞文の場所句が他動詞文の主語になるような構文交替があるのか、その根本的な仕組が明らかではない。本研究では、外界の世界において何を図、または何を地として認知し、概念化するかが言語形式の違いにつながっているという考え方を踏まえ、それを存在と所有のスキーマの関係に応用し、自動詞文と他動詞文の交替を説明する。

3. 存在と所有のスキーマとその言語化

所有を、存在を表す動詞‘BE’で表すか‘HAVE’で表すかは言語によって異なるが（池上 1981）、世界の言語を見れば、HAVE 型言語は少数派であることが指摘されている（Benveniste1966, Lyons1968）ことを踏まえ、本研究は BE 所有を所有の原型と考える。そして場所理論と Heine（1997）の叙述所有表現に用いられるスキーマに基づいて[2]、存在スキーマから所有スキーマへの拡張を仮定する。（図 2 に示したように HAVE 所有スキーマは BE 所有スキーマとは独立して存在するが、両者には所有の概念において接点がある。これについては紙幅の関係で本稿では扱わない。）

3.1. 本研究が考える BE 存在と BE 所有

BE 存在と BE 所有は「場所」と「参与者」を関係付ける最も基本的な概念であり、その違いは両者の把握の違いにある。場所（z）が背景で対象（y）に際立ちがある BE 存在（図 2-①）が基本であり、その場所が、対象の存在が場所を特徴付けるものとして把握されることによって焦点化されて（＝際立ちが与えられて）生まれるのが BE 所有だと考える。その二者関係は分離不可能所有（a. 全体⇔部分 b. 主体⇔側面・状態 c. 血縁関係）と分離可能所有（d. 所有主体⇔所有対象）の両方を含み、本研究が「所有」と言う場合はこのように存在とのつながりで把握される最も基本的な二者関係のことを指し、図 2-③のような実空間（個物や人も見方によって場とみなされる）、あるいは図 2-④⑤⑥⑦のような所有空間･関数空間[3]において参照点構造によって概念化されると考える。

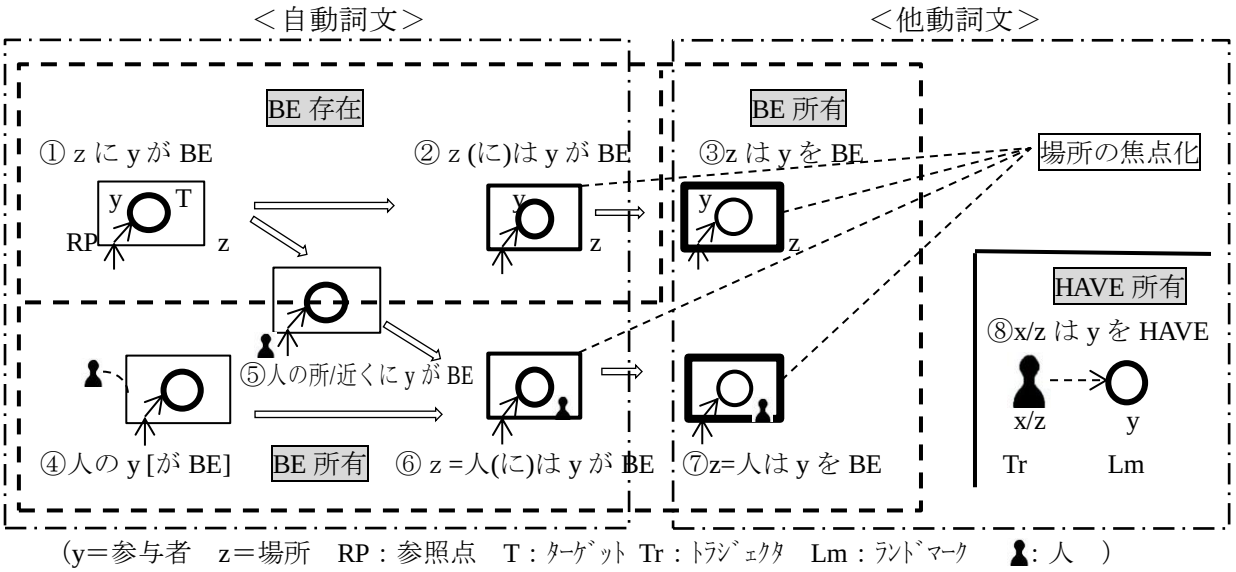


図 2　BE 存在スキーマから BE 所有のスキーマへの拡張

最も基本となるのはBE存在の①「庭に一本の木がある」で、場所が焦点化されると②「庭には一本の木がある」になる[4]。モノと場所の関係の場合、この段階では存在の意味だが、さらに際立ちが与えられると、③の所有の意味をもつ他動詞文になる。一方、①の場所が人と関係付けられると、⑤「太郎のところに車がある」が生まれ、その場所が焦点化されると⑥「太郎には車がある」になる。⑥では場所が人と関係づけられ、所有空間として把握される。この場所がさらに際立ちが与えられると⑦の他動詞文になる。人との関係付けにはこれとは別に、④のように「太郎の車がある」のように所有格によって関係付けられたものからの拡張がある[5]。

BE存在（自動詞構文）	BE所有（自動詞構文）	BE所有（他動詞構文）
① 庭に一本の木がある	④#太郎の車がある	③*庭は一本の木をある
② 庭には一本の木がある	⑤#太郎のところに車がある	⑦*太郎は車をある
	⑥ 太郎(に)は車がある	HAVE所有（他動詞構文）
		⑧ 太郎は車を持っている

（#：所有の解釈としては不自然、*：非文法的）

図2の右端に位置する拡張事例である③⑦のBE所有の他動詞文とは何か。上に示した事態の把握の在り方からすれば、その場所（人を含む）が、対象の存在が場所を特徴付けるものとして把握されることによって際立ちが与えられ、対象が場所と一体として認識されるような分離不可能所有であることが推測される。日本語では、BEに相当する「ある」「いる」にはヲ格名詞をとる構文がない[6]。しかし、BE所有がさらに拡張することによって、日本語にも所有スキーマが言語化した他動詞文が存在するというのが本研究の立場であり、自動詞文を作るBE存在①②・BE所有⑥とその拡張例に対して、他動詞文を作るBE所有③⑦とその拡張例の間に成立する自他交替に注目する。

3.2. 本研究が提案する事態認知モデル

図3は、図1の使役連鎖の事態把握を上段に据えている。参与者中心の事態把握であり、視点Ⅰは使役エネルギーの始発点から下位に向かう。（ⅳ）「アル」が表す存在（状態）の事象については、前節で示しようにBE存在からBE所有へ、中段から下段へと拡張する（＝拡張A）。下段は場所中心の事態把握であり、中段はその中間である。拡張AによるBE所有は原因事象の読み込みという視点Ⅱによってさらに拡張すると考える（＝拡張B）。この拡張Bとは、存在/所有の原因として(ⅲ)「オコル（発生）」や(ⅱ)「ナル（変化・移動）」が読み込まれるということである。このようにして全体の事態認知のスキーマを描いたのが図3である。‘y’の円筒の図は中段・下段にもあるが省略。（ⅲ）の「オコル」は（ⅱ）の変化事象を表す「ナル」とは区別している。場所（z）は実空間だけでなく、所有空間・関数空間も表す。

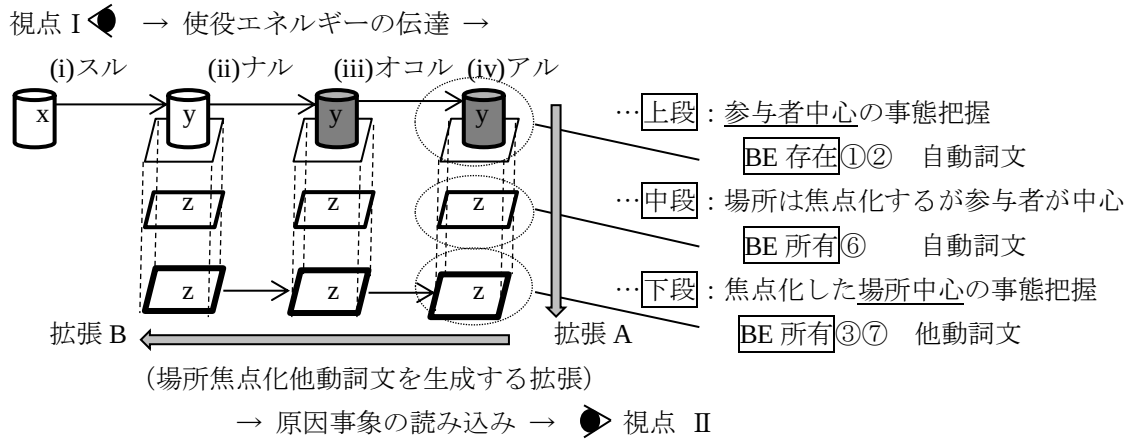


図3　拡張したBE所有スキーマを組みこんだ認知モデル

4.　本研究が提案する認知モデルによる自他交替の説明

4.1.　自他交替の二つのタイプ

冒頭の（2）～（6）の構文交替と（1）の使役起動交替との違いは、図 4 のようになる。同じ他動詞構文「N1 が N2 を V」でも、事態の捉え方によって 2 つのタイプがあるのである。

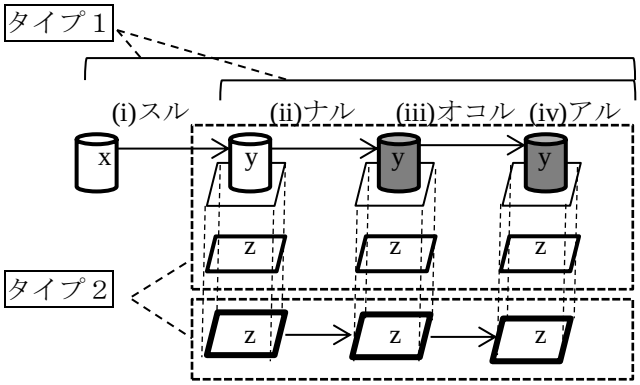


図 4　自他交替の 2 つのタイプの事態認知

	タイプ 1	タイプ 2
[他動詞文]	x が y を (z に) V	z が y を V
	| |	| |
[自動詞文]	φ　y が (z に) V	z に y が V

図 5　自他交替の 2 つのタイプと構文

タイプ 1 は（1）の交替で、上段の参与者中心の事態把握におけるプロファイルの範囲の違いによる交替である。これは主客分離を前提にした主客交替である。タイプ 2 は上・中段の参与者が主語になる自動詞文と下段の場所が焦点化されて主語になる他動詞文（主客が一体となた場の状態変化、場の状態を表す他動詞文）との交替である。2 つのタイプと構文のつながりをまとめると図 5 のようになる。ここで重要なことは、タイプ 2 の自動詞文がモノに注目してその変化・発生（/消失）を叙述するのに対して、他動詞文はモノの変化・発生によって場がそのモノの非所有（/所有）の状態から所有（/非所有）の状態へと変化することを叙述するということである。以下で（2）～（6）の交替現象がタイプ 2 の交替現象としてどのように説明できるのか見ていく。

4.2.　（2）（3）の自他交替

この交替は、図 3 と 4 に示した（iii）と（iv）の事態認知が言語化したものである。この交替では自動詞と他動詞の形態に対立がない[7]。伝統的には両用動詞と呼ばれてきたものである。(3) は、「発生したものがある場所に存在するような変化が起こる」と捉えるのか、「ある場所が何もない状態から発生したものをもつ状態へと変化する」と捉えるかの違いである。(2) の「伴う」の意味は「常に一緒に存在する＝離れずにとどまる」つまり、消失の否定の概念だと考えられるので、(iii) と（iv）の事態認知の言語化に分類できる。下に類例を追加しておく。

（7）a. 柳の木に芽が吹く／植物に根が張る　　b. 柳の木が芽を吹く／植物が根を張る

（8）a. 汚泥から/に有毒ガスが発生する　　b. 汚泥が有毒ガスを発生する[8]

4.3.　（4）の自他交替

これも（iii）と（iv）の事態認知が言語化したものだが、この交替では自動詞と他動詞の形態が「起こる」「起こす」のように対立がある。形態上の対立には二つあり、1 つは、他動詞に専用の形態がある場合である。これは「失う・なくす・[醤油を]切らす（→例文 9)」など数は少ない。もう 1 つは、タイプ 1 の使役起動交替と同じ形態になる場合である。事態の把握が異なるのに、タイプ 1 と 2 で同じ形態を用いるのは、どちらも第一と第二の際立ちを与えられた二者の関係を叙述するからだと言える。どちらの意味になるかは共起名詞・文脈による。下に類例を追加しておく。

（9）　a. （うちに）醤油が切れた　　b. （うちは）醤油を切らした

cf. タイプ 1 の自他交替：a. 糸が切れた　　b. 太郎は糸を切った

（10）a. 街には昔の面影が残る　　b. 街は昔の面影を残す

（11）a. 太郎(に)は熱が出た　　b. 太郎は熱を出した

cf. タイプ 1 の自他交替：a. 外に机が出た　b. 太郎は机を外に出した

4.4.　（5）の自他交替

これはこれまでのものと少し異なる。y の名詞句[N1 の N2]がそれぞれ所有者と被所有者（母体と側面）として把握され、それが場所と対象物「z[=N1]の N2」のように再解釈されるタイプである。（5）は (ii)と(iv)の事態認知が言語化したものである。このタイプは（5）のように自動詞と他動詞が同形となる場合と下の例文のように異形（「～まる」と「～める」）になる場合がある。

（12）a. 台風の勢力が強まり、…

b. 台風は勢力を強め、…

（13）a. 太郎の心臓の鼓動が速まり、…

b. 太郎は心臓の鼓動を速め、…

タイプ 2（再解釈形）

[他動詞文]　z[=N1] が N2 を V

|　|

[自動詞文]　y[N1　の N2] が V

└ 再解釈： z の N2

図 5　タイプ 2 のバリエーション

ガ格名詞だけに注目すれば、部分と全体のどちらをトラジェクターにするかという選択の違いによると言えるし、ヲ格名詞との関係が再帰になっていることも確かである。しかし、その根底には、変化事象によって全体（＝場）がどのような側面をもつように変化するのかという事態の捉え方があるという点が重要である。

4.5.　（6）の自他交替

この交替はタイプ 2 の再解釈形であり、(ii)と(iv)の事態認知が言語化したものだが、独自の特徴をもつ。それは、形態上対立する他動詞（14a）がありながら自動詞（14b）と同形の他動詞構文（14c）を作ることである。この特徴をとらえて、本研究ではこのような他動詞用法を＜有対自動詞の両用動詞化＞と呼ぶ。（a）と（b）の交替はタイプ 1 で、（b）と（c）の交替はタイプ 2 である。

（14）a. 太郎は（自分の）席をかえた　　【叙述内容】主語名詞は対象をどうしたか

類例：太郎は（自分の）仕事を終えた／太郎は（自分の）計算を間違えた

b. 太郎の席がかわった（＝6a）　　【叙述内容】対象はどうなったか

類例：太郎の仕事が終わった／太郎の計算が間違った

c. 太郎は席をかわった（＝6b）　　【叙述内容】主語名詞はどうなったか

類例：太郎は仕事を終わった／太郎は計算を間違った

（6b）のヲ格名詞は「[場所] を移動する」という意味が関係している（福島 1991）という指摘がある。確かに「～をかわる」は実空間での移動であり、「～を終わる」ではそれが時空間に、「～を間違う」では思考空間に拡張していると見られる。しかし、単に移動の意味の自動詞になっているのではない。主客一体となった場所（＝主語名詞）の特徴付けが変化するという事態把握がその根底にあり、その点で（6b/14c）も場所焦点化他動詞構文であると見るのが妥当である（小柳 2012）。

5.　結語

モノ同士の行為・因果連鎖に基づいた主客分離を前提とした事態認知モデルだけでは自他交替現象を十分に説明できない。モノと場所の関係に注目し、主客一体の存在と所有のスキーマを組み込んだ事態認知モデルによって、それが十分に説明できる。＜対象の変化＞のみならず＜場の変化＞の事態把握のあり方がどのように言語化に反映されているのを考えることが重要である。

[1] Setting Subject Construction は主語名詞句が、述語の表す事態の setting になっていると分析される。また、この構文で見かけ上は他動詞構文になっていても、受動文が成立しないことから、参与者主語の他動詞文とは異なることを指摘している。(Langacker 1990：233)

[2] 場所理論とは、場所と移動の概念が基本となり状態や変化など抽象的な概念が形成されるという考え方であり、存在から所有の意味場への拡張については Jackendoff（1983）が詳しい。また、Heine（1997）は所有につながるイベントスキーマとし 8 つ想定した。①Action ②Location ③Companion ④ Genitive ⑤ Goal ⑥Topic ⑦Source ⑧Equation。 このうち②～⑨が BE 所有と関係し、本稿では②と④を中心に取り上げる。いわゆる与格主語をとるとされる⑤は基本的に②と連続していると考える。

[3] 関数空間とは、金水（2002）が所有文を限量的存在文の一種に分類し、二格名詞句は「関数の値域」を表すと分析していることを踏まえてつけた名前である。例えば、「妻」という語は「だれの」という情報がないと伝達情報として完結しない。「山田さんの妻」の「山田さん」が関数空間として把握される。

[4] 図 2 で場所が焦点化されている 4 つの事象スキーマのうち、②だけが BE 存在なのは、実空間における場所と対象の関係だからからと考えられる。所有空間または関数空間となると BE 所有として認知される。

[5] ④⑤は日本語では不自然だが、他の言語では用いられる。下はヒンディー語の例。（今村 2009）

（ⅰ）raam=kaa ek beta hai.　　（ⅱ）rames=ke pass do kaare hai.

ラーム+属格後置詞+1+息子+BE　　ラメーシュ+属格後置詞+そば+2+車+ BE

[6] 中国語の「有」には②に相当する「(在) 院子里有一棵树」と⑦に相当する「太郎有一辆车」がある。

[7] 自他交替現象において形態上の対立がない理由については、同じ事態（＝参与者と場所という構成要素が同じ）の捉え方の違いだからだと言える。影山（2002）で語彙意味論の観点から同様の分析がされている。

[8] Levin（1993）は、この交替は “locative alternation”ではなく “substance/source alternation”としているが、影山（2002）では場所項の焦点化による交替だと分析している。小柳（2010）の分析も参照されたい。

主要参考文献

バンヴェニスト, エミール（1983）『一般言語学の諸問題』みすず書房, [Benveniste, E.（1966）Problémes de Linguistique Génerale].

Clark, Eve V. (1978) “Locationals: Existential, locative, and Possessive Constructions,” in Joseph H. Greenberg (ed). *Universals of Human Language. 4: Syntax*, 85-126. Stanford University Press.

Croft, William（1991）*Foundations Syntactic Categories and Grammatical Relation: The Cognitive Organization of Information.* University of Chicago Press.

福島直恭（1991）「他動性と自動性の対立の解消に関する一考察」『学習院女子短期大学紀要』29. 107-122.

Heine, Bernd（1997）*Possession: Cognitive sources, forces and Grammaticalization*. Cambridge University Press.

池上嘉彦（1981）『「する」と「なる」の言語学』大修館書店.

今村泰也（2009）「ヒンディー語の所有表現再考　―類型論的観点からの考察―」『言語と文明』7. 17-39

Jackendoff, Ray（1983）Semantics and Cognition. MIT Press.

影山太郎（2002）「非対格構造の他動詞」『文法理論：レキシコンと統語』東京大学出版会. 119-145.

金水敏（2002）「存在表現の構造と意味」『近代語研究』11. 近代語学会. 473-493.

Langacker, R. W.（1990）*Concept, Image and Symbol*. Mouton de Gruyter.

Langacker, R. W.（1991）*Foundations of Cognitive Grammar: Vol.II* , Stanford University Press.

Levin, Beth（1993）*English Verb Classes and Alternations: a preliminary investigation* . University of Chicago Press.

Lyons, J (1968) *Introduction To Theoretical Linguistics*. Cambridge University Press.

中村芳久（2000）「認知文法から見た語彙と構文―自他交替と受動態の文法化―」『金沢大学文学部論集言語・文学篇』20. 75-103.

岡智之（2013）『場所の言語学』ひつじ書房.

小柳昇（2010）「コーパスに基づいた漢語サ変動詞の他動詞用法の分析　－「場主語構文」の観点から－」『言語・地域文化研究』16. 東京外国語大学大学院. 69-91.

小柳昇（2012）「有対自動詞の両用動詞化のメカニズム　－「場主語構文」の観点からの分析－」『コーパスに基づく言語学教育研究報告』No.8. 東京外国語大学. 129-152.

日本語の文法・談話と場の理論

大塚正之（早稲田大学）

1　はじめに

日本語の文法・談話については、欧米の言語とは異なる構造が存在すると指摘されている。また、欧米のポライトネスの考え方では、日本の敬語や礼儀のある表現を理解することはできず、これと異なる「わきまえ」という考え方が必要であることが明らかにされてきた。

その背景には、日本の文化の基底にある「場」を重視する考え方があり、その場というものが日本語の文法や談話の構造に大きな影響を与えていると考えられる。場があることにより、状況やコンテクストに依存しなくても、主語を明示しないまま意思疎通に支障がないため、日常的に主語のない談話が交わされる。この場と日本語の文法及び談話との関係性をより具体的、実証的なデータに基づいて解明したい。

2.　場と状況（情況）・コンテクスト

言語処理の計算モデルを創ろうとした場合、必然的に自然言語の持つ文脈依存性に逢着する。一般に自然言語の多義性というのは、文脈依存性の高さを表現していると考えられる。コンテクストは文脈と訳されることが多いが、多義的であり、例えば、聴き手の注意に重点を置く関連性理論(Relevance Theory)では、コンテクストとは、発話を解釈する際、聴き手がアクセスする想定（assumption）の集合と定義される。対話の認知プロセスにおいては、広義には発話の行われる環境を指すとされ、発話を取り巻く場面および発話の前後を取り巻く他の発話を意味すると言う（ことばの認知科学事典 305 頁）。また、言語の産出と理解に関する意味づけ論は、「意味は主体の情況内でつくられる」とし、状況が意味づけされる以前のもの・ことの集合であるのに対し、情況は、今・ここを生きる主体にとっての意味世界であり、ことばは情況内で意味づけられる事態としてその意味を担うと言う（田中・深谷：1998）。場の言語学は、このような情況・コンテクストという概念を更に拡張し、むしろ、その言語の話し手や聞き手を取り巻く環境をひろく「場」として捉えて、この「場」の方から言語を捉えようとする視点を持つ。

また、言語の発達についてみると、言語には生得的な基盤があるとしても、それが具体的にどのように発現するのかは、その個体が生育する環境に深く依存していることは、言語的環境が欠けていれば言語の習得が困難となり、どのような言語を習得するのかは、その個体が生育する一定期間内の言語環境に依存することからも明らかである。この言語発達を可能とするような環境を広く「場」と考えて、どのような場がどのような言語の発達を可能とし、また促進するのかを考える視点を持つのが場の言語学である。

3　場と日本語の文法

中村雄二郎（『西田幾多郎Ⅱ』: 2001）は、時枝誠記の言語過程説における客体的表現（詞）と主体的表現（辞）との結びつきにおける＜場面＞の考え方を西田幾多郎の場所の論理と関係づけて、日本語の統語論には次のような特徴があると指摘している。①日本語では、その全体が幾重にも最後に来る辞（主体的表現）によって包まれるから、主観性を帯びた感情的な文が常態となること、②文は、辞によって語る主体と繋がり、主体のいる場面と繋がり、この場面の拘束が大きいこと、

③日本語の文は、辞＋詞という主客の融合を重層的に含んでいるので、体験的なことばを深めるのに都合がよいが、客観的、概念的世界を構築するのには不都合であること、④日本語の文では、詞＋辞の結びつきからなる構造によって、真の主体は、辞の働きとしてだけ見出されるから、文法上での形式的な主語の存在はあまり重要ではないこと（同書 52 頁以下）である。このように日本語は主観性が高いということは、熊倉千之『日本語の深層』（2011）でも指摘されている。

他方、池上嘉彦『「する」と「なる」の言語学』（1981）では、英語と日本語とを比較したとき、いくつかのかなり際立った対立的な特徴を見てとることができるとして、次のように指摘されている。すなわち、英語では、基本的な運動の動詞が＜場所の変化＞を指す場合から＜状態の変化＞を表すのによく転用される。他方、日本語では、＜状態の変化＞を表す動詞が＜場所の変化＞を表すのに転用されるとし、その原因を、英語の場合は、個体中心的な捉え方が本来そうでない分野に拡大されており、日本語の場合は、できごと全体として捉える見方が拡大適用されているとし、これを、＜モノ＞と＜コト＞に対比させる。そこから、個体＝モノが何かをするという視点と全体＝コトが何かになるという視点が導かれ、「する」と「なる」の言語学的差異が導かれる。そして、この「なる」は、主体のない世界、無我の世界やウォーフが描くホーピ族の世界へと連なっていく。そこには動詞を場の変化として捉える視点がある。

古来、ヒトは、個人的主体としては自らを意識していなかったのであり、仏教は古くから主体などないと言い続けている。プラトンないしプラトン主義も実在するのはイデアであり、個物的実体ではないと主張し続けている。近代的な自我が意識され始めたのは、遡っても１２、３世紀であり、はっきりとした近代的自我が誕生したのは，更に後のことであり、それまでは主体が何かをするというよりも、何かが起きるというのが動詞の本来の作用であったと考えられる。場の中での動きを表現するのが動詞であり、動かない何かを表現するのが名詞であり、それは場を規定する 2 つのモメントであったと考えられる。そこは、誰かが何かをするというよりも、その場において何かが動くという世界である。そのため、文字を持たない民族を始め、古代の民族は、場の中で、常に変化する世界を観ていたのであり、この全体の動く状態が日本語の「コト」であり、このできごとの中で、動かない対象を「モノ」として理解していたと考えられる。日本語は、その名残を今もとどめている言語の 1 つであると位置づけられる。そのような言語は、日本語だけではなく、カフカス地方やアメリカ・インディアンやマヤの部族の間にも見出すことができるのではないかと思われる。動きというのは、場の変化であり、誰かが何かをするという観念では捉えられない。誰かが何かをするという観念が生まれて、言語は対格化して行ったものと推測される。つまり、時枝の言語過程説の考え方も、池上の「なる」の考え方も、その背景には、動詞を場の変化として捉える視点が含まれており、この場の変化を主体が表現しようとして生まれたのが言語であると考えられる。それは、ヒトが今、ここで起きている現象を捉えて、シンボル化したものであるから、自ずから主観的になるし、誰かが何かをするという視点を欠いたものになる。

4　日本語の談話と場の理論

談話（ディスコース）は、複数人のことばの交換を前提としており、最も場の制約が出やすい場面である。常に相手の存在を前提として、言葉を語るとき、場における主観性が表れやすいものとなる。場においては、言語は客観的事実を叙述するものではなく、主観の表現であるから、談話の相手との関係性がまず先に存在している。場における談話者相互の関係性が言語表現に影響を与

えることになる。その最も典型的な表現方法が敬語である。場においては、談話の相手が内部の人間か外部の人間か、目上の人間が，同輩か、目下の人間かによって、使うことができる言葉の範囲が決まっている。目下の人間に使ってよい表現を目上の人間に使うと、言葉の使い方を誤っていると指摘される。これは文法における規則ではなく、世間＝閉じられた社会のルール＝規則である。これを場のルールと言ってもよい。日本語は、場の中で語られるので、文法上の制約だけではなく、場のルールの制約を受ける。いくら文法的に正しい言語を話しても、場のルールに反していれば、その言語表現は誤っていると評価されるのである。それを無視して使用すると、意味は通じるが、世間の壁にぶち当たることになる。この場のルールを知らないことを世間知らずと言う。

5　場の理論と言語

場の理論の理論的背景は、場の量子論と複雑系科学である。ニュートン力学は個物が実在し、すべては要素に還元することができると考えるのに対し、場の量子論は、個物は場における相互作用であり、複雑系科学は、部分の寄せ集めが全体ではないと考える。場における相互作用という考え方は、物理学だけではなく、生物学、心理学、脳科学においても拡がりつつある。脳科学者ベンジャミン・リベットは、ヒトは、無意識の間に行動を開始し、その後に前頭葉が行動するよう指令を出すということを実証し、そこからヒトに自由意思があるのかが議論されている。言語もまた無意識の間に形成され、前頭葉は後からこれを意識する。そこには言語を形成する場が存在し、その場から言語が意識化されてくることが脳科学的事実である。言語を発するとき、既にそこには、遺伝子（ユングの原型、蛇への恐怖感など)、脳の来歴（シュッツの沈殿、メルロ=ポンティの相互身体性など)、具体的な文脈（コンテクストなど）などによって構成される場が存在しており、そこで発するべき言語がほぼ規定されており、意識的に話そうとするときには、既に運動野に発するべき言語情報は伝えられているのである。

そこで、改めて場の理論から観た言語の特徴を整理すると、古代からヒトは上記のような遺伝子（生来的な脳構造)、脳の来歴（社会的生活の場の中で脳がそれに適応するように形成されていく)、具体的な生活の時空環境（コンテクスト）が統合された具体的な場の中で生活をしており、場の中で言語を育んできたと考えられる。場の中では、これを冷静に外から見る第三者はおらず、誰もが場の中にあって、場の変化を感じ取り、これをことば（音声言語や身振り、動作などの手話言語）で表現したものと考えられる。すなわち、主体が何かをするというのではなく、場が変化するという現象を主観的に音声言語や手話言語によって表現してきたのである。場という社会的関係性がまず存在しており、その社会的な場の中で言語は生成されていったと考えられる。そこから、日本語には、談話について述べたような制約が場に課せられるとともに、これまでに各研究者によって発表されたような性質が色濃く残っているのである。各研究者の発表した内容を場の視点から整理をすると，次のように考えることができる。

第１に、動詞とは場の変化を表現するものである。現代のことばで「ＡがＢを殺した」という事態は、場の内部からみると、「Ｂが死んだ」という場の変化が中心となる事態である。この事態を引き起こしたと考えられるのがＡであるとすると、「ＡによってＢが死んだ」と表現されることになる。動詞を主体の行為としてではなく、場の変化として捉える視点から考えると、当然の結果である。おそらく古代社会においては、どの民族も、場の変化を表現するため、その変化を動詞で捉え、変化しないものを名詞で捉えたと考えられる。したがって、「ＡによってＢが死んだ」という

表現は、人類が言語を習得し始めた当初は、どの民族にも共通のことであったと考えられるのである。何故なら、その昔は、場から離れた独立した行為主体というものはなく、みなそれぞれの場の中で生活をしていたと考えられるからである。古代ギリシャを例にとれば、まず存在していたのはコロス（合唱隊）であり、ヒーローはその後にコロスから誕生したと考えられるのである。

第2に、場においてはお互いの関係性がまず存在する。その関係性の背後に主体があると考える。したがって、関係性の中で言葉が生まれる。日本人の場合、妻や夫は、子どもが生まれると、子との関係性の中で、母や父になり、その親であった者は、その子との関係の中で、祖母、祖父になる。生まれた子は、下の子が生まれると、下の子との関係の中で、兄になる。一人称表現も、日本社会では、その場の関係性の中で、僕であったり、俺であったり、私であったりする。なぜなら、言葉は場における他との関係性の中で生成されるものであるから、相手との社会関係が変化すれば、自己を表現する言葉も当然に変化をしていくのである。場の中では、自我というものがまず存在するわけではなく、常に関係性の中で決定されるのである。「の」というのも本来、関係性を示す格助詞であったと考えられる。私の兄、あなたの会社は明らかに関係性であるが、これは更に所有へと拡張され、「私の子です」「俺の女だ」など、本来関係性であるものが所有性を帯びて使用される場合も生まれて来る。

第3に、場においては、主体が変化を感じてことばで表現するのであるから、事態の主観的把握がことばになる。そして場の働きが弱まるにつれて、次第に客観的な事態把握ができるようになっていく。そのため、場が弱く、客観的把握の強い言語社会においても、乳幼児期の言語の獲得段階においては、主観的な把握が中心となるのである。何故なら、乳幼児期においては、母子相互作用の場の中に存在しているのであり、母子関係から自他の分離が進むに連れて、その社会に適合する言語を習得していくからである。

第4に、場においては、ことばは場の変化や場の状態を表現する。場の内部において、どの場がどのようになったのか、どのようになっているのかを感じたままに表現するのが本来の言葉の使い方である。場においては、ある場所で何かが起きるのである。この「ある場所」というのは、ヒトなどの主体の場合でも同じである。「桃の木が実を結ぶ」という場合、「桃の木」は主語ではなく、桃の木という場所において実を結ぶという変化が生じているという事態を見たとおりに報告する事態把握である。したがって、「桃の木に実が結ぶ」と表現することもできる。場の状態の表現の仕方なので、どちらの表現も可能なのである。また、「象は鼻が長い」という場合、「象」は、主語ではなく、象という場所に於いて鼻が長いという状態が存在しているという事態把握であると考えられる。場においては、ある場所で何かが起きると考えることができるのである。

以上のように個から出発するのではなく、場という概念を導入することによって、音声言語、手話言語に共通するコミュニケーションの可能性を明らかにしていくことが可能となると考えられる。

（以上）